

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	肥田 路美
論文題目	初唐仏教美術の研究
<p>審査要旨</p> <p>東アジアの仏教ならびに仏教美術を一貫してリードしてきたのは、いうまでもなく中国仏教であり、中国仏教美術であった。中国南北朝時代の仏教が韓半島、そしてわが国に伝来するが、中国では南北を統合した隋、隋を引き継いだ唐が登場して盛唐時代になると、仏教美術は絶頂期を迎える。肥田路美氏は、この唐様式が東アジアの仏教美術の古典的規範となったとする。その特色はあたかも仏菩薩を現身にみえるがごとく、写実的な実態感を持って造形しようとする意識と手法なのだという。</p> <p>そして初唐とは盛唐の仏教美術を用意した時代であったと位置づけ、時代的には唐代最初のおよそ一世紀の間に展開した仏教美術の性格と意義を、まずインドとの関係、つぎに世俗権との関係、そして大画面変相図の成立という三つの観点から考察し、唐様式の成立要因を明らかにしようとするきわめて意欲的な研究である。</p> <p>本研究は、序章につづく三部十二章と終章から構成されているが、三部は肥田氏が三つの観点から論じたいというそれぞれに対応する。すなわち、第一部は「初唐美術とインド」、第二部は「初唐美術と世俗権」、第三部は「初唐仏教美術における大画面変相図」で、各部とも四章からなる。</p> <p>まず第一部では西方世界との交流が盛んであった初唐時代におけるインド請来の仏像と情報を取り上げ、具体的な様相と意義について四章にわたって考察する。第一章「玄奘による釈迦像七軀の請来」で、玄奘請来像は釈迦の現し身を拝するに等しいと認識された像であったことを明らかにする。つぎに第二章「西安出土塼仏の制作事情と意義」では、「印度佛像」銘塼仏は玄奘請来のインドの塼仏をもとにつくられたが、大雁塔とそこに奉安された経像の永固保全を期して制作されたもの、一方「大唐善業」銘塼仏もインド請来の図像を採用したもので、塼仏制作の利益が喧伝される中でつくられたものと考察する。第三章「ブッダガヤ金剛座真容の受容と展開」では、初唐時代に大流行した偏袒右肩・降魔触地印如来坐像はブッダガヤ大精舎の本尊像の模写図、摸刻像によるものだが、如来像でありながら宝冠や頸飾、臂釧などを身につけたものが多く、こうした降魔触地印像は仏伝的釈迦から普遍的如来へ、顕教から密教へ、インドから中国への結節点に位置するもので、初唐後半期を象徴するものという。第四章「優填王像の流行と意義」では、優填王像を取り上げ、それは史上最初の仏像で、生身の釈迦の三十二相を写し取った瑞像であった。中国人にとって、優填王像とはインドの国王がつくり、インドから中国へと釈迦の预言通りに請来されたものであった。したがって、その像容はインド風であった。つまり、その正真性の表現手段として、インドの出自に相応しいと見做された肉身や着衣の描写が選ばれたという。</p> <p>つぎに第二部では、政治的性格を帯びた中国仏教と世俗権との関わり合いが、初唐時代の仏教美術の上にかいかなる様態をもたらしたかについて考察する。まず第一章「一州一寺制と皇帝等身仏像」では、天下諸州に各一官寺を置いた一州一寺制と、皇帝と等身の仏像の造立に着目し、前者は中央集権国家による仏教の一元的管理統制の意味が強い政策で、後者は皇帝のイメージの上に人民に福利安楽を与える仏の聖性や威徳力を重ねようとしたものと解釈する。第二章「龍門奉先寺洞盧舎那大仏の造立」では、華嚴の世界観と君主の菩薩道を説く『梵網経』の思想がまずあり、発願の動機としては人心の撫安掌握と武後の亡父母に対する追善が推定でき、検校の善導と惠簡は民衆にアピールできる人材だったという。第三章「則天武後の登極と宝慶寺石仏」では、世俗権と仏教教団が深い関係を持った則天武后政権の誕生にかかわる仏教美術品として、宝慶寺石仏を取り上げ、その造立事情を明らかにする。第四章「瑞像の政治性」では、靈驗説話を集成した道宣の『集神州三宝感通録』をもとに、瑞像信仰と世俗権の関係を追求し、具体例として涼州番禾県瑞像を取り上げる。以上四章を通じて、世俗権側が造寺造仏活動や瑞像・仏舎利への帰依へと向かう場合には、統治の正当性を証明し、護法の聖王であることを示そうとする</p>	

氏名 肥田 路美

意識を確認する。

さらに第三部では、初唐の仏教美術として実在感のある写実的表現が追及され、大画面変相図が登場するが、これらがどのように実現されたかを考察する。第一章「大画面変相図の成立と雲のモチーフ」では、時間の推移の中で変幻するさまをあらわす変相図における雲は、空間的移動と時間の経過を示し、さらに莊嚴の役割を担うことを明らかにする。第二章「大画面変相図における山岳景」では、山岳景が大画面変相図の観者をして、仏が彼方の他界ではなく眼前地続きのところにいるという仮想的な見仏体験を得さしめる仕掛けだったことを明らかにした。第三章「奈良国立博物館所蔵刺繍釈迦如來說法図」では、表題の作品を取り上げ、高宗期後期から則天武后期のころ宮中の刺繍専門工房でつくられ、また主尊の如来倚像は優填王と同形式であることを指摘する。第四章「梁代画家張僧繇の評価からみた唐代仏教絵画の性格」では、梁代の張僧繇の生まれ変わりが呉道玄とされた唐代において、寺院壁画として大画面変相図が盛行したが、その本質は仏や浄土を実在感のある描写によって見せるところにあったことを明らかにした。

以上のように肥田氏は唐様式を成立させた要因について考察するが、最後に直接的な要因として、仏像を生身の仏と見立てて現世的利益を祈願した瑞像信仰や、陀羅尼を誦し懺悔して除災招福を期待した雑密的信仰の流行、分かりやすく実感しやすい視覚体験を要請した浄土教や三階教に代表される行・信の仏教の隆盛、そして自らのイメージを仏像に重ねようとした統一王朝の皇帝たちの関与であったと締め括る。唐様式成立の要因を追求した研究成果はきわめて大なるものと認め、博士(文学)の学位に相当するものであると判断する。

公開審査会開催日	2010年5月8日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	大橋 一章
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	Ph.D.(テサロニキ大)	益田 朋幸
審査委員	早稲田大学・名誉教授	文学博士(早稲田大学)	吉村 怜
審査委員	明治大学・教授	博士(文学)京都大学	氣賀澤 保規
審査委員			